

Title	アルクインとラバヌス・マウルスの影響を維持した人びと
Sub Title	Alcuin's and Rabanus Maurus's later influence
Author	田中, 克佳(Tanaka, Katsuyoshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2000
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.51 (2000.), p.1- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000051-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アルクインとラバヌス・マウルスの影響を維持した人びと

Alcuin's and Rabanus Maurus's Later Influence

田 中 克 佳*
Katsuyoshi Tanaka

Previously I tried to introduce Alcuin (735?-804) and Rabanus Maurus (780?-856) through translating *ALUCUIN AND THE RISE OF THE CHRISTIAN SCHOOLS* (by West, Andrew Fleming, 1893, London) into Japanese (See Nos. 36 & 43 of this bulletin).

This is a similar work to introduce the later influence of these two figures and its end. It is said that the "middle of the tenth century marks the limit of what may be styled the age of Alcuin in education." (p. 176)

はじめに

先に筆者は、「アルクイン」と「ラバヌス・マウルス」について、West, Andrew Fleming の "ALCUIN AND THE RISE OF THE CHRISTIAN SCHOOLS," 1893, London によって、人物と業績の翻訳・紹介を試みた¹⁾。

本稿は、これら二人の人物のその後における影響とその終焉、つまり教育史上のアルクインの時代の終焉——それは10世紀の中葉と述べられている——を、前回同様の翻訳・紹介によって眺めることに意図がある。(以下、章立て・章名は筆者の構成による。また、叙述の必要上筆者が書き加えた部分は [] で示し、訳出部分の上記原著ページは (p. X-) で示した。また、前回同様、本稿中の [ランダム] は『小学館ランダムハウス英和大辞典』、[岩] は『岩波西洋人名辞典・増補版』の略記である。)

第3章²⁾ アルクインとラバヌスの影響を維持した人びと

アルクインがフランク王国全土に対してもった関係を、ラバヌスはとくにドイツに対してもった。ラバヌスの影響力は、師匠の影響力とは別個に識別することがで

きるが、二人はやがて混じり合って、西欧の教育の伝統を幾世代にもわたって推し進めた。[この推進の様子にかかわる叙述は、先の紹介の末尾で紹介した³⁾。参照。] (p. 165)

[本稿は、アルクインの影響を代表する後世の学徒たちの中で比較的卓越した人物の紹介を試みる。彼らの多くは、ラバヌスを経由した人たちである。]

セルバトゥス・ループス Servatus Lupus (805-862) は、アルクインの生徒であったオールドリチ Aldrich 管轄下のフェリエールの修道院で教育を受けた。オールドリチがサンスの大司教になった時、彼は自らのこの生徒を急遽フルダに派遣した。この生徒 [ループス] は、当時名声の絶頂にあったラバヌスの下で学んだ。神学だけでなく文学の学徒としての輝かしい経歴の後、彼は、836年にフランク王国に戻ってきた。間もなくオールドリチが死ぬと、セルバトゥス・ループスは、842年にその後を継いでフェリエールの大修道院長となった。そしてその地で教鞭を執り、名声を博し、周囲に多数の弟子とかなりの蔵書を集め、彼自身が同時代の生粋の文人の一人となり、幾世紀もの間知られることのなかった古典作家たちの発掘までも行っている。フルダでは、彼は、ゼリゲンシュタットの大修道院にしばしば出掛けている

* 慶應義塾大学文学部教授
(教育学・教育史)

る。沢山の蔵書をもったこの大修道院の当時の統治者であったアインハルト Einhard——チャールズ大帝の伝記作家であり、セルヴァトゥスと親しい関係にあった——の意見を聞くためである。アインハルトの文学趣味とセルヴァトゥスに対する友情は、セルヴァトゥスの勉学の進歩を助け、こうしてフルダの教育を補充することとなった。(pp. 167-8)

ハイモ Haymo は、フルダでラバヌスの同級生、トゥールではアルクインの教えを受けた仲間の一人であるが、トゥールからフルダに戻って、その学校でしばらく教鞭を執った。841年にフルダを去ってハルベルシュタットの司教となり、853年に死んだ。(p. 168)

ヴァラフリド・ストラボ Walafriid Strabo (807年生れ) は、子供の頃コンスタンス湖畔にあるライヘナウの学校で最初の勉学に従事した後、そこからフルダに送られ、ラバヌスの下で学んだ。フルダからライヘナウに戻り、数年間その地の大修道院の学校を指導し、842年にその大修道院長に選ばれた。彼はフルダの学問を移植したが、教師としての名声に、さらに詩人として注目すべき業績を付け加えた。彼の名声は、おそらく彼の功績以上のものであるが、しかし師匠の教えを広く行きわたらせた点で彼には明らかな功績がある。「彼は多数の者を教えた Docuit multos」とは、ヴァラフリドの墓碑銘の中でのラバヌス自身の証言である。これは、ヴァラフリドの教え子が、とくに言及しなければならないほど多数であったことを示している。(pp. 168-9)

ルドルフ Rudolph (800?-866) はフルダの修道僧である。彼は、ラバヌスの生徒であると同時に彼の伝記作家でもあったが、大修道院学校の世界でラバヌスの後継者となった。もちろん師匠よりはるかに劣っていたけれども、大変博学の人物であったと考えられており、力量で劣ったとはいえラバヌスの方法 the methods を維持した。このルドルフの生徒の一人で、後にエルヴァンゲンの大修道院長となったエルメンリク Ermenric は、師に捧げた著書の中で師の学識の深さと教師としての成功を証言している。(p. 169)

リウトベルト Liutpert は、853年に死去したが、ニュー・コルビの有能な大修道院長であった。彼もまたフルダでは、彼の勉学の師であったラバヌスとともに一介の修道僧であった。彼はまた、ラバヌスの命令でフルダから外に出た修道僧たちの協同生活体であるヒルシャオの初代大修道院長として仕えた。修道僧マギンハルト Maginhard がフルダにいたのも、同じ時期のことである。(p. 169)

パスカシウス・ラトベルト Paschasius Ratpert (865年死) は、俗界から、当時アーデルハルト Adelhard が支配していたコルビの修道院へと引き籠もった。彼は勉学に熱中し、選ばれて仲間の生徒たちを教えるほどの成功をおさめた。キケロとテレンティウス Terence (訳注・Publius Terentius Afer, B. C. 190-159?: ローマの喜劇詩人 [ランダム]) が、修道院に入る以前の彼のお気に入り作家たちであった。彼の活躍と勤勉はめざましい。彼は、ザクセンにニュー・コルビの大修道院を建てる目的でアーデルハルトに同伴した。彼は多くの生徒を教えた。その中には、アーデルハルト II 世、ハンプルクの大司教となったアンスカリウス Ansharius, どちらもボーヴェの司教になったヒルデマン Hildemann とオド Odo, そしてニュー・コルビの後の大修道院長のヴァリン Warin がいる。844年には彼自身がオールド・コルビの大修道院長となったが、865年にその地で死んだ。彼の生徒であったボーヴェのオドが、大修道院長としての彼の後継者となった。(pp. 169-70)

その他の、言及に値するオールド・コルビの修道僧たちの中にラトラムヌス Ratramnus がいる。彼の学芸の知識は顕著であり、彼の聖職者として読むべきものの中にはラテン教父だけでなくギリシャ教父が含まれている。彼は、おそらくアーデルハルトが大修道院長となった頃にその修道院に入り、昇進の大望などまったく抱くことなく一介の修道僧として生涯を過ごし、その地で死んだ。彼の友人にセルヴァトゥス・ループスとボーヴェのオドがいる。アルクインとラバヌスの影響に関連づけることのできるザクセンのニュー・コルビの修道院のもう一人の修道僧は、レンベルト Rembert である。彼は、アンスカリウスから修道僧の聖別を受け、856年にハンプルクの大司教としてアンスカリウスの後を継いだ。

セルヴァトゥス・ループスの同級生でサン・ドニの後の大修道院長となり、840年に死んだヒルドゥイン Hilduin と、年少の頃両親によってフェリエールの修道院に献じられ、そこでセルヴァトゥス・ループスの下で教育を受けたウィーンの司教のアド Ado (800?-875) の名前もあげておくことができる。(p. 170)

ヴェレンベルト Werembert (884年死) は、若い頃フルダで、ラバヌス・マウルスの指導の下で勉強し、その後、大きな影響力をもつサン・ギャルの大修道院に入った。ラバヌスの指導を受けた学生仲間にはヴァイセンブルクのオトフリード Otfried がいる。ヴェレンベルトは、同時代の年代記作家によれば、ラテン語とギリシャ語の両方、また美術、哲学、詩、音楽、彫刻、そして神

学と歴史に熟達していたという。彼の生涯については、彼がサン・ギャルの修道僧であり、しばらくの間教鞭を執ったという事実以上のことはほとんど知られていない。

サン・ギャルの大修道院長となったグリマルドゥス Grimaldus は、ライヘナウの修道院で教育を受けた。そこでの彼の教育は、友人のエルメンリク Ermenric を介してアルクインとラバヌスの影響に触れた。このエルメンリクはライヘナウの修道僧で、かつてヴァラフリド・ストラボの生徒であった。ヴェレンベルトの友人であり、また同級生でもあったハルモト Harmot (884 年死) は、グリマルドゥスが亡くなる前から、實際上、サン・ギャルの大修道院を支配していた。グリマルドゥスが死ぬとハルモトは、満場一致で選ばれて、グリマルドゥスの後を継いだ。彼は種々の論文を書いたが、大修道院の蔵書も大いに増加させた。(pp. 170-1)

相互の暖かい個人的友情と学者として共に傑出していたことから親密な関係にあったサン・ギャルの三人の修道僧、ラトベルト Ratbert, ノトケル Notker, トゥティロ Tutilo がいる。彼らは、アルクインとラバヌスを直接に継承する系列の教師の教育を受けていないことは明らかだが、それでもこの二人の巨匠の著作に通じていた。この三人の中でノトケルは、とくに言及に値する。彼は、840 年頃に一生徒としてサン・ギャルに入った。そしてしばらくの後、内校 an inner school の校長になった。当時この修道院には、修道院生活のために献じられた被奉納者のための内校と、外部の人 externi のための外校 an outer school が含まれていた。その注釈書の一つの中で彼は、ヒエロニムス、アウグスティヌスおよびクリュソストモス (訳注・Chrysostom, St. J. 347?-407; コンスタンチノーブルの総大司教; キリシヤ教父中最大の説教家 [ランダム]) とラバヌスの著作を並置し、アルクインの文法をプリスキアヌスその人の文法をさえ凌ぐものと称賛している。ノトケルの影響に触れた人びとの中に、プリュムの大修道院長のレギノ Regino とメッツの司教のロベルト Robert がいる。(pp. 171-2)

サン・ギャルからフランク王国のオーセールに門を転じると、ここでもアルクインとラバヌスの影響力が支配的な推進力として浮かび上がってくる。(p. 172)

オーセールのエリク Eric of Auxerre (およそ 834-881) は、子供の頃、オーセールにあるサン・ジェルマン修道院に入った。そこで最初の勉学に従事した後、フルダに出かけ、その地でハイモの教えを受けた。その後フェリエールに出かけたが、その地で彼の先生はセル

ヴァトゥス・ループスであった。セルヴァトゥスの下での勉強期間が完了すると、彼は、オーセールに帰り、そこにあるサン・ジェルマン修道院学校を委ねられた。彼の生徒たちの中には、フクバルド Hucbald と有名なオーセールのレーミ Remy がいる。(p. 172)

フクバルド (930 年頃死) はサン・アマンの修道僧であったが、レーミにつぐ同時代の指導的教師とみなされていた。彼は、キリスト教詩人にして自由学芸と美術の学徒であり、かつアルクインの生徒の一人について学んだことのあるミロ Milo の甥であった。彼は、叔父の監督の下に初期の勉学に従事し、ついでサン・アマンからオーセールにあるサン・ジェルマンの修道院に行って、そこでレーミやその他の著名な生徒とともにエリクの下で課程を終了した。学芸における彼の熟達度は、彼の称賛者の一人が「彼は自由学芸の技能が抜群であったために、古代の哲学者たちにも誉えられた」と主張しているほどに顕著なものであった。(pp. 172-3)

9 世紀が終わって 10 世紀が始まる頃フランク王国で最も有名な教師は、オーセールのレーミであった。彼は、はじめにサン・ジェルマンの大修道院の修道僧となったが、そこでの師はハイモとセルヴァトゥス・ループスの生徒であったオーセールのエリクであった。アマンの有名な修道僧のフクバルドは、彼の同級生だったといわれている。エリクが死ぬと、彼が後を継いで学校を預かった。間もなく彼は、ランスの大司教のフルコ Fulco に召喚されて、フクバルドと一緒に、衰微していた司教管区の諸学校の再建に行かされた。レーミは自由学芸と神学の両方を教えたが、大司教自身が彼の聴講生の一人であった。レーミが教えた生徒たちとこの生徒たちの後継者たちは、10 世紀を通じてランスの学校を立派に継続させた。この学校の後期の生徒に、歴史家のフロドアル Frodoard, フルーリィのアッポ Abbo, そしてレーミ自身の二人の生徒でローレーヌ地方に学校を建てるさいに大きな影響を与えたヒルデボルト Hildebold とブリドゥルフ Blidulph がいる。フルコが死ぬとレーミはランスからパリに移り、パリに、万人に開かれた、そして教会の規則から自由な、修道院学校ではない公開の学校 a public school を建てた。ここで彼は哲学と自由学芸と神学を教え、当時アウグスティヌスのものとされていた論文の「範疇論 On the Categories」を解説し、テキストにマルティアヌス・カペラを使って自由学芸を広く教授し、こうしてついにこの時期まで疑問視されていたこの作家を名誉ある地位に据えた。マルティアヌスをより容易に理解できるようにするために、彼は綿密な注釈

書を書いた。「バリ大学の最初の搖籃の地⁴⁾」となったこの学校から、レーミの生徒の中で最も偉大な、クリュニの大修道院長となったオドが出た。レーミが学問の復興の新紀元を画する人物であることは、間違いなく真実である。彼の影響力は、アルクインやラバヌスにも匹敵すると考える者もいる。証明することはできないが、昔の年代記作家の言葉を借用して「長い間廃れていた学問が、彼の下で再び息を吹き返し、彼の教えによっていわば再生したのは確かである⁵⁾」と書いて間違いはない。彼の著作にはすでに触れたマルティアヌス・カペラの解説のほかに、文法家のドナトゥスとプリスキアヌスに関する注釈書と音楽に関する論文が含まれていた。(pp. 173-4)

クリュニのオド(880-942)は、まだ子供の頃に両親によってトゥールのサン・マルタン修道院に献じられたが、すぐには修道僧にはならなかった。世俗生活のうちに青春時代を過ごした後、19歳の時にトゥールに戻り、サン・マルタンの司教座聖堂参事会員となった。彼は、ヴァージル Virgil (訳注・Vergilius, M. P., B. C. 70-19; ローマ第一の詩人 [岩]) その他文学方面の古代作家たちを著しく好んだが、プリスキアヌスを勉強することによって文法面の不足を補った。やがて彼は、もっと徹底的に学芸を勉強したいと考えるようになり、トゥールからパリに出た。パリではオーセールのレーミが公開講義を行っていた。レーミの下でオドは、とくに心がけて弁証法と音楽を学び、またその他の自由学芸のすべてを学んだ。トゥールに戻った彼は、不確実な典拠によるが、大修道院学校を預かったといわれている。やがて彼は、ついに俗界を捨て、修道院生活に身を捧げる決心をする。30歳の時彼は、バーガンディの修道院に、おそらく彼の全蔵書であった「100冊の本」を携えて入った。927年に大修道院長が死ぬと、オドは選ばれてその後を継ぎ、その修道院の長となっただけでなく、クリュニその他のもっと重要な大修道院の長となった。彼は、フランク王国における一般的な修道院改革を成就すること、そしてそれとの関連で多数の学校を設立することで大きな影響力を発揮した。これらの学校の一つに、フルーリの学校があった。もう一つの学校が、メッツの近くのゴルツ大修道院に復活され、ランスの学校の多くの生徒がそこに移って、修道院的学問共同体を形成した。彼はまた、トゥールのサン・ジュリアン大修道院に学問の基礎を築き、彼自身そこでしばらく時を過ごした。彼の名声は急速に広まり、かつてラバヌスがそうであったように、彼は法王や王侯の相談を受けた。彼は、ローマに三

度旅行している。彼の死は、942年頃のことである。(pp. 174-5)

以上述べた人びとは、10世紀の中葉までアルクインとラバヌスの影響力を維持した人たちである。彼らと彼らの仲間たちは、チャールズ大帝の後継者たちの下において、教育界に高い地位を占めた。しかし彼らがその全部であったというわけではない。というのは、歴史というものは完全には同時代の記録を保存しないものだからである。したがって、彼らが、アルクインによって始められた運動の影響力を具体的に示す最も大きな部分をなしていることは確実であるが、しかし完全ということとはできないと考えるのが、結局のところ正当である。この継承関係の中で傑出して目立つ名前は、セルバトゥス・ループス、ヴェラフリド・ストラボ、パスカシウス・ラトベルト、ヴェレンベルト、オーセールのエリク、フクバルド、オーセールのレーミ、そしてクリュニのオドである。(pp. 175-6)

結 び

10世紀の中葉は、教育におけるアルクインの時代と呼べるものの限界を画する。というのは、この時点で彼の直接的影響力は徐々に姿を消すことになるからである。(p. 176)

アルクインの仕事は、発端であり、前兆であった。結果は、彼のプランより大きなものとなったが、後の発展で現実のものとなるのに先立って、まず彼の仕事がなければならなかったのである。彼の仕事は、それなりの明確な生涯をもっていた。それは、10世紀末までに終わったように思われる。しかし人間の歴史には、絶対的な断絶などというものは存在しない。それゆえ10世紀の中葉から11世紀の中葉にかけてアルクインの系統に連なる教師と学生が、ほぼ、あるいは完全に視界から消え去ったとしても、当然それらの影響力も途絶えたとは考えないでいただきたい。この時期は、大なる混乱の時期であり、当然の結果として歴史的記録の失われた時期であった。しかしながら、残存したか細い学問をみくびってはいけぬ。たとえそれが、闇の中にまったく弱々しく、ほのかに見えるものであったにしても。というのは学問といえばそれしかなかったからである。それゆえ、明確な証拠によって先立つ時代の人びとと結びつけることのできない、新たな、革命理論をことしぬ教師たちがその後出現する時、彼らは、私たちには不明確だが彼らには明らかであった既存の伝統を再開し、推し進めたと考えなければならない。彼らに利用できる伝統は、アル

クインによって再生させられた時代の学校から流れ出た伝統が、唯一つ存在しただけだったのである。(pp. 178-9)

【注】 [4] 5) は原著脚注]

- 1) 田中克佳「アルクインのこと」〔英〕Alcuin〔羅〕Alcui-nus〔Albinus〕Flaccus〈735?-804〉」慶應義塾大学大学

院社会学研究科紀要第36号, 1993

同「ラバヌス・マウルスのこと」〔羅〕Rabanus Maurus, 780?-856) 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要第43号, 1996

- 2) この章立ては, 注1) の第2の論文の章立てを引き継ぐ章立てである。
 3) 注1) の第1の論文, 参照。
 4) *Histoire Littéraire de la France*, VI, p. 100.
 5) *Histoire Littéraire de la France*, VI, p. 101.